

百済の政治状況と図讖思想の伝播について

小池 寛

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

百済の政治状況と図讖思想の伝播について

小池 寛

1. はじめに

朝鮮半島の三国時代は、高句麗、百済、新羅および伽耶連合が攻防を繰り返した時代と言える。その中心には常に中国南北朝の国々や589年に統一王朝国家となった隋や唐が存在しており、甚大な影響力を有していた。また、朝鮮半島の三国は、折々に同盟や抗争を繰り返す反面、墓制や宗教、建築技術、金工などを相互に取り入れ、豊かな文化を作り上げた時代でもあった。

1971年に不時発見された公州市宋山里古墳群に所在する武寧王陵には、中国南朝で盛行していた単室墓系埴室墓を埋葬施設として取り入れたばかりでなく、構築部材である埴や鎮墓獸、青磁など、数多くの文物が南朝から移入された。また、墳墓の選地に関しても中国の影響を強く受けている可能性が指摘されている^(注1)。本稿では、中国起源である風水図讖思想の朝鮮半島への伝播時期について、武寧王陵に焦点を当てて考察するものである。

2. 百済を取り巻く政治状況

百済は、朝鮮半島南部の馬韓に所在した伯済国が周辺の小国家を統合し、漢江流域を中心に紀元前18年に高句麗の東明聖王の子孫とされる温祚王によって建国された。百済は建国以降475年に高句麗軍の南下により首都慰礼城が陥落し、公州熊津城に遷都するまでを前期漢城期。538年に聖王が公州熊津城から扶餘泗泚城に遷都するまでを中期熊津期。扶餘泗泚城に遷都し、唐・新羅連合軍により滅ぼされた660年までを後期泗泚期に区分される^(注2)。

ここでは、まず、百済を取り巻く政治状況について概観しておきたい。337年に慕容皝によって遼東半島に建国された中国前燕では、後継者をめぐる闘争により敗軍家臣が挙って高句麗に亡命する事態を招く。その中に安岳3号墳に埋葬された冬寿も含まれており、その後、彼らは高句麗国内において権勢を振るう。342年に前燕が高句麗の首都丸都を制圧し、その翌年の343年、高句麗故国原王は前燕に朝貢する。369年に桓温率いる中国東晋が前燕を攻撃する間に高句麗は南下し百済攻撃に転じる。高句麗故国原王軍の南下に対し



図1 中国東晋時代の東アジア(注3に加筆)

て百濟近肖古王は、雉壤で迎撃し、371年に百濟が高句麗の首都である平壤城を陥落させ漢城に遷都する。百濟はその直後に南朝東晋に朝貢し、さまざまな文物や制度、思想が百濟に導入されることになる。391年に高句麗王に就いた広開土王が、

周辺地域の契丹や濊、百濟、新羅などに侵攻を繰り返している。427年には高句麗長寿王が平壤へ遷都を果たす。百濟が中国南朝に朝貢するなかで、高句麗は北魏との関係を強化し、百濟の首都慰礼城を陥落させる。

一方、中期熊津期の百濟は、479年に東城王が即位し、国力の復興に供するために南方地域と伽耶地域へ勢力を拡大するとともに新羅との関係を強化し、高句麗の南下に対抗する。また、東城王の死後、501年に斯摩王(後の諡：武寧王)が即位すると、倭との関係強化を推し進めるとともに、中国南朝梁に朝貢を行い「寧東大將軍」の爵号を得る。後期泗泚期を引き継いだ聖王は、公州熊津城よりも自然の要塞に囲まれ、錦江流域を見下ろすことができる丘陵上に扶餘泗泚城を築城するとともに、錦江の水運を多用し、広域な物流を展開した。一方、政治的には西進する新羅と伽耶地域をめぐる争奪激化や北方の国境沿いでの高句麗との軍事衝突により、国力は著しく弱体化するとともに、新羅により漢城期の慰礼城が陥落し、両国の関係悪化に拍車をかけることとなる。

589年、中国統一王朝である隋が建国される。隋の中央集権体制の再構築がすすみ、国内においては土地や税制、兵制の整備などが進む反面、華北と江南を結ぶ大運河の建設により国力は疲弊し、僅か38年で唐への政権交代を余儀なくされる。その間、隋を基軸に百濟、高句麗、新羅が攻防を繰り返す。百濟は高句麗とともに新羅に繰り返し侵攻するが、唐は、高句麗を討伐する際に同調した百濟を攻撃し、660年に高句麗の大軍が百濟に派兵され、百濟を滅亡に追い込むこととなる。^(注3)

以上のように、朝鮮半島の三国時代の国々は、常に中国王朝との関係に重きを置き、数々の政策を展開したが、三国間においての政治的な関係を重要視しながらも攻防に終始した。その過程の中で、各国とも他国の文化や思想を相互的に取り入れながら、豊かな文化国家を育んだ時代と言える。

3. 中国南朝と百済武寧王陵の墓制

前章でも概観したように百済と中国南朝との政治的な関係は、単に両国だけの政治的関係ではなく、百済を取り巻く周辺国との軍事的衝突や友好関係の構築などがその背景にある。中国南朝は、北朝である北魏が中国北部を統一し、国内が南北に分裂した時期に漢民族によって樹立された王朝であり、長江中下流域を中心とする江南域に宋(420～479年)、齊(479～502年)、梁(502～557年)、陳(557～589年)王朝が樹立される。建康(南京)に王都をおき、589年に隋によって陳王朝が滅ぼされ南朝は終焉する。

中国南朝は、大きく長江下流域に所在する南京地域と中流域に所在する武漢地域に分けることができる。長江流域の墓制の類型的分析を行った戴俊英^(注4)は、それまでの研究史をまとめ問題点を指摘したうえで、220年の後漢滅亡から589年の隋王朝成立までの魏晋南北朝時代に築造された306基の墳墓について集成と類型的分析を行った。そこでは、南京に代表される江蘇省と武漢に代表される湖北省、そして、和県や青陽を中心とする安徽省に所在する墳墓の所在地、築造時期、墓室構造の分類や規模、埋葬法などを網羅する。当該論文では、奥壁や両側壁に副室が付設される多室墓が24基(8%)、中央壁により2室を構築する双室墓が52基(17%)、長方形の玄室のみで構築される単室墓が230基(75%)を数えることを明らかにした。なお、武寧王陵の単室墓系塼室墓の祖型と考えられる長方凸形単室墓の地域別基数は、江蘇省南京地域では168基(73%)、湖北武漢地域では58基(25%)、安徽省一帯では4基(2%)であることも明らかにした。また、墳墓を王族・豪族墓と官人・庶民墓に分け、その傾向を把握するとともに、多室墓を3型式、双室墓を3型式、単室墓を4型式に分類し、先に示した3地域における墓室構造についての詳細な検討を行っている。この類型的分析を基層として、王族・豪族墓を王都である建康(南京)とそれ以外の地域に分け分類・編年を行った。特に、建康(南京)を中心とする東晋早期(317年)から南朝陳までの王族・豪族墓のすべての埋葬施設が塼室墓であることを指摘するとともに、平面プランと内部構造から317～420年の東晋と464～589年の南朝の2時期について分類を行った。そのなかで25基を数える二期の塼室墓は、羨道が付設される単室墓系塼室墓であり、天井部の構造は21基がアーチ形であることを指摘した。また、棺床や祭壇、墓誌をもつものもあり、壁面上部には室内を照らす宝珠形の燈明用龕龍が設けられていることも指摘している。このように精緻な集成と編年研究は他に類を見ず、当該期の中国墓制の研究を進めるうえで不可欠な論文として、現在もお広く認識されている^(注5)。

さて、百済は、近肖古王27(372)年に東晋に朝貢し「鎮東將軍・領楽浪太守」の爵号を与えられており、4世紀後半にかけての朝貢などの外交が百済漢江下流域に越州窯系青磁

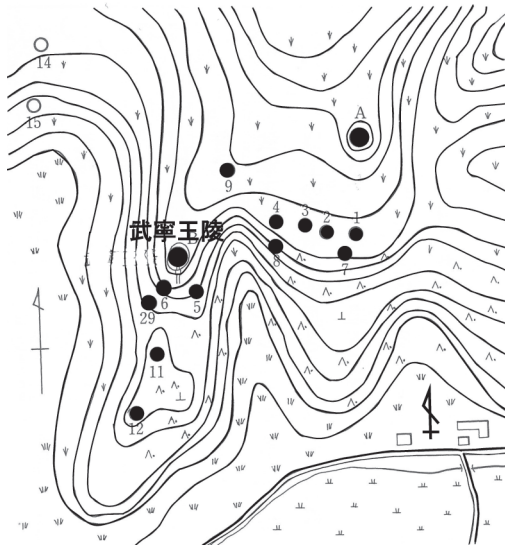


図2 宋山里古墳群の分布(注6を加除)

が多く出土する背景と結びつける見解もみられる。また、4世紀中葉の原城法泉里の羊形青磁やソウル風納洞土城の銅製熨斗、石村洞3号墳の青磁四耳壺なども百済の積極的外交によって東晋からもたらされたとする見解が提示されている。^(注6)しかし、土器や金属器のみならず、6世紀中葉に築造された武寧王陵のように墓室構造や構築部材である磚、副葬品などに南朝の要素が認められる王陵の存在は、築造集団の派遣や構築部材の移入など、確実に南朝文化が背景にあったことを示す重要な根拠ともなっている。

^(注7)武寧王陵は、忠清南道公州郡公州邑内に所在する王陵であり、1971年に不時発見された。百済中期の王都公州から北西約1kmの丘陵上に築造された十数基からなる宋山里古墳群の1基である。直径約20mの円墳で埋葬施設は南方に開口する。玄室は焼成された磚により構築されており、全長4.2m、幅2.7mを測り、玄室床面には棺台を設けている。側壁はアーチ形天井であり、玄門内部と奥壁は垂直に構築されている。壁体には蓮華文や格子文などの范形押圧による磚を用い、横位に4枚の長手平積みの磚を並べ、縦位に1段の小口縦積み磚を一単位として、交互に積み上げられている。北壁に1基、側壁に2か所の宝

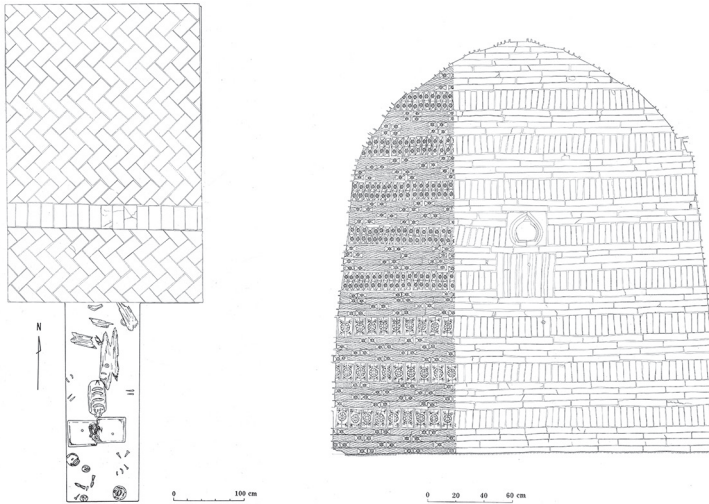


図3 武寧王陵実測図(注7に加筆修正)

珠形燈明用龕龍が設けられ、中国製青磁皿上には燈芯が残存する。羨道は全長2.9m、幅1.0mを測り、使用磚の文様や構築方法は玄室と同じである。羨道の前面には全長9.3mにわたり墓道が

掘り込まれており、墓道中央には塼築の排水溝が設けられている。玄室東側には王、西側には王妃の高野槇製木棺が安置され、棺内の木製枕と足座の位置関係から南枕に復元されている。王の棺からは耳飾や頸飾、銀製鍔帯、金銀製佩飾や飾履などが副葬され、傍らには金銅単龍環頭大刀、頭部に獸

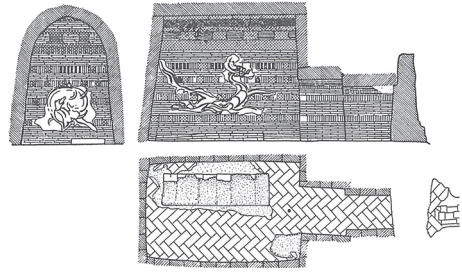


図4 宋山里6号墳(注6から転載)

帯鏡、脚部に方格規矩鏡を配している。また、王妃の棺からは数多くの装身具とともに、獸帯鏡や銅托、銀盞のほか銅製熨斗などが副葬されている。一方、玄室床面から様々な金属器とともに黒釉四耳壺や白磁碗、羨道部には墓誌や青磁六耳壺、鉄製五銖銭とともに墓守や魔除けのための鎮墓獸が安置されている。特筆すべきは、羨道に置かれていた閃緑岩製の墓誌である。その銘文から、癸卯523年に62歳で没し、乙巳525年に埋葬され、中国南朝梁から「寧東大將軍」の爵号を受けた百済斯麻王(後の諡：武寧王)と、丙午526年に没し、己酉529年に埋葬された王妃の合葬墓であることが判明した。墓誌の爵号は、『梁書列伝』^(注8)の記述と一致している。このように百済において被葬者が特定できる王墓として極めて重要な墳墓であり、南朝梁から舶来された数々の副葬品や墓誌や買地券などは、墓室構造や副葬品の招来にのみならず、葬送儀礼や墳墓選地など、新たに伝播された宗教や思想が背景にあることを示している。

なお、武寧王陵の床面は、長方形の塼を奥壁部では石室主軸線から右方へ45度に配列し、2列目は左方に45度、以降は交互に綾杉状に配列している。このような綾杉状の床塼の配列は、江蘇省句容県陳家村2号塼室墓^(注9)に類例があり、また、壁面の塼積方法も南京市郎家山4号塼室墓^(注10)に類例がある。一方、武寧王陵が所在する尾根上に築造された宋山里29号墳の閉塞蓮華文塼の側面に「造此是建業人也」の線刻文字^(注11)が確認されている。「建業」とは、3～4世紀に南京を首都とした王都や5～6世紀の宋・齊・梁・陳王朝出身を示す古名であり、塼が南京出身の工人によって焼成されたことを示す重要な考古資料である。また、宋山里6号墳の使用塼にも「梁官瓦爲師矣」と判読できる線刻文字^(注12)があり、梁と密接な関係を有した工人集団の存在を示している。

4. 中国、朝鮮半島における図讖思想について

中国における図讖思想は、天と地からなる陰陽説と木・火・土・金・水からなる五行説が基層となり徐々に体系化されてきた。紀元前27世紀に相地の第一人者であった青烏子が、黄帝の問いに答える様式で著された図讖書『青烏経』^(注13)には、「陰陽符合 天地交通

内気萌生 外気成形 内外相乗 風水自成」(陰陽が符合し、天と地が交われれば、内なる気は芽生え、外なる気は形成される。その内外の気が相乗され、風水(気)は自ずと生成される)との表記があり、「蔵風得水」が重要視されたことを示している。漢代に入ると図像により吉凶を読み解く識緯説(註14)を基層として本格的に図識思想として体系化され、図像や方位盤である羅盤を専門的に解説する科学的要素が風水図識思想として確立される。以後の中国においては、風水図識思想によって吉凶が判断され、墓地選地や居地選地などに多用されるとともに、王朝交代や王宮選地、戦術などにも多用されたことがしばしば文献に登場しており、同思想が広く流布したことを示している。

一方、朝鮮半島における風水図識思想については、朝鮮総督府で調査研究を行った村上智順(註15)が最も体系的に論述しており、朝鮮半島における風水図識思想が、どのように今日まで継承され、社会生活に影響を及ぼしたかについて詳述されている。しかし、中国における風水図識思想についての起源や歴史についての記述があるものの、朝鮮半島における起源については資料的な限界もあり、明確にはされていない。

朝鮮半島における風水図識思想は、新羅時代末期から高麗時代にかけて盛行し、現代においても、その影響は随所にみられるものの、起源論については、漠然とした伝播が首肯されるものの、三国遺事などの文献には記載がみられないことから、あまり深められていない状況である。

5. 墳墓の立地からみた百濟古墳

王都が漢城におかれた百濟前期は、漢江南岸流域に石村洞古墳群(註16)が平野部に築造される。100基近い墳墓が確認されているが、通有にみられる盛土をもつ古墳以外に積石塚古墳が多くみられ、埋葬施設は土壙墓や甕棺墓、石室墓など多様である。一方、その東方平野部には、土壙墓や甕棺墓、横穴式石室などが築造される可楽洞古墳群や芳蕒洞古墳群が確認されている。芳蕒洞1号墳のように穹窿状の天井を有する古墳が5～6世紀に出現する一方、ソウル市より80km東方に位置する春城郡芳洞里古墳群には、天井部の対向する石材を内側に交互にずらしながら三角形の持ち送りにより穹窿状天井をもつ横穴式石室が築造される。先に述べた石村洞古墳群にも同様な石室は散見されることから高句麗配下において築造された古墳として認識されている。この時期の大半の古墳群は、平坦な丘陵部や尾根に築造されず平野部に築造されており、集落域から可視できる墳墓選地は首肯できるが、風水図識思想などの宗教的な理念による選地は行われなかったと考えられる。

一方、中期熊津期には忠清南道公州市を中心とする半径10kmの範囲に数多くの古墳群が築造される。すべての古墳群名を網羅することは枚挙にいとまがないが、熊津期の王族墳

墓の代表的な宋山里古墳群^(注17)について詳しくみておきたい。武寧王陵が所在する宋山里古墳群は、公州市域の西北丘陵に所在し、約20基の古墳が南方に張り出す平坦な尾根上とその東方に広がる緩斜面に築造されている。そのなかで最も古い古墳は、尾根の東方に広がる緩斜面西端に築造された右片袖式横穴式石室を埋葬施設とする4号墳であり、5世紀後半に比定されている。すでに天井部最高所は失われているが、穹窿状天井を呈している。1927年の調査で金銅製帯金具や金銅製歩揺付飾金具、鉄地金銅張胡籙金具、錫製金具などの金属製品が多数出土した。また、5号墳も同じく穹窿状天井であるが、武寧王陵が築造された南方に張り出す平坦な尾根の東方基部に位置している。また、棺床と閉塞部材に埴が用いられ、鉄鉾や鉄鏃などが出土していることから4号墳より後出する6世紀初頭に比定されている。6号墳の床面には綾杉状の埴が敷き詰められており、東壁近くに棺台が付設されている。壁面は、1段の小口縦積みの埴を配置し、その間に横位に4枚、6枚、8枚の長手平積みの埴を各々単位として3段積み上げている。また、埴で構築された4面の壁面には赤色粘土が塗布され、粘土上に四神を描いている。天井部がアーチ状を呈することと使用された埴に「梁官瓦」の銘を持つことに加え、壁面の埴の積み上げ手法が、武寧王陵のように画一的ではなく、装飾性が高いことなどから、武寧王陵よりは後出すると考えられる。また、29号墳は、先に述べた6号墳の南西隣接地に築造されている。穹窿状天井を有する片袖式横穴式石室であり、床面には綾杉状の埴が敷き詰められている。壁面は埴状の石材で構築されており、漆喰が塗布されている。切り石により壁面が構築されており、片袖式横穴式石室であることから、宋山里4・5号墳の系譜上にあるものの古墳の位置関係から武寧王陵より後出する6世紀後半^(注18)に比定されている。

以上のように、百済前期の漢江南岸に所在する石村洞古墳群や可楽洞古墳群、芳萐洞古墳群などは丘陵上に立地しておらず、平野部に築造されていることから風水図讖思想に基づく選地はなかったと考えられる。

先に述べたように宋山里古墳群において穹窿状天井を有する4号墳(5世紀後半)→5号墳(6世紀初頭)→29号墳(6世紀後半)への変遷が考えられ、埴積み方法から6世紀中葉の武寧王陵とそれより後出する6号墳への変遷が考えられる。特に、王族系譜上、武寧王の死後に即位する聖王は、百済本記などによれば554年に死去した記述があることから、武寧王陵と同じく埴室墓である6号墳の被葬者として推定されることが一般的である。なお、百済後期には扶余地域を中心に数多くの古墳が築造される。6世紀中葉に築造される陵山里中下塚は、両袖式の横穴式石室であるが、埴室墓の系譜を引くアーチ構造の天井となっている。陵山里古墳群^(注19)では、それ以降、切り石により横穴式石室ないし石槨を築造しており、アーチ形の墓室は築造されないことが確認できている。埴室墓の系譜を引くアーチ構

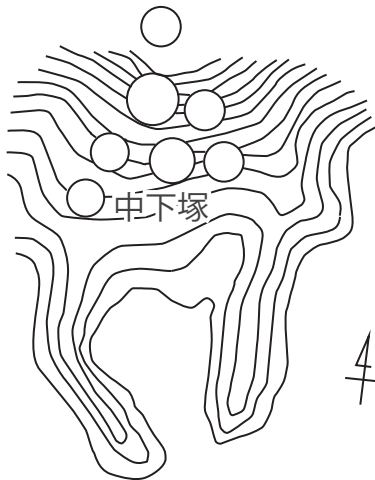


図5 陵山里古墳群の分布(注6を加除)

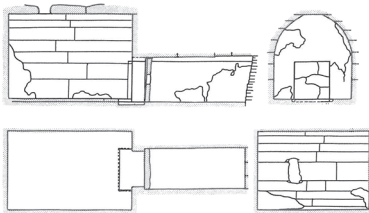


図6 陵山里中下塚古墳(注7転載)

造の天井部をもつ陵山里中下塚は、王族の系譜を引く被葬者像が想定されている。

6. まとめ

中国東晋が前燕を攻撃し、高句麗は百濟攻撃に転じる。しかし、百濟近肖古王は高句麗平壤城を陥落させ漢城に遷都する。百濟が中国南朝に朝貢するなか、高句麗によって百濟慰礼城は陥落する。中期熊津期の東城王が新羅との関係を強化し、高句麗の南下に対抗する。また、東城王の死後斯摩王(武寧王)が即位し、倭との関係強化を進め、中国南朝梁に朝貢を行い「寧東大將軍」の爵号を贈られる。このように、百濟は、常に中国王朝との関係性に重きをおきながら、高句麗や新羅との攻防に終始することとなる。

その中国南朝は、長江下流域を中心とする江南域に宋、齊、梁、陳王朝を樹立し、建康を主都とした。戴俊英は、東晋から南朝終焉期の長江流域に分布する306基の墳墓の編年研究を行い、武寧王陵の単

室墓系塼室墓の祖型が江蘇省南京地域や湖北武漢地域、安徽省一帯に230基点在していることと、南朝の塼室墓の21基がアーチ形であることを明らかにした。これは百濟が東晋への朝貢を重視し、武寧王陵の築造集団の派遣や構築部材の移入などに至る政治活動を活発化したことを物語っている。

一方、中国における図讖思想は、紀元前27世紀の青烏子『青烏経』にすでにその存在を示す記述がある。また、漢代には図像による讖緯説を基層として風水図讖思想が確立される。しかし、朝鮮半島における風水図讖思想の起源については、三国時代の集落選地に多用されたとされるが、一般的には新羅時代末期から高麗時代に道説によって体系化されたと考えられている。

百濟において一定の広さを有する平坦な尾根や丘陵緩斜面に古墳が築造されるのは、百濟中期の宋山里古墳群が最初であり、また、中国南朝で盛んに築造される塼室墓ないしその系譜上にある石室構造をもっていることから、王族が葬られた墳墓群と捉えられる。中国南朝で多用された風水図讖思想は、文献上では三国時代に遡ることは確認できないが、

以上の政治的環境や諸要素から少なくとも武寧王陵築造に際しては、墓地を選地する宗教的な理念として風水図讖思想が採用されている可能性が非常に高いと言える。また、百済後期の扶余地域に築造される陵山里古墳群は、塼室墓の系譜を引くアーチ形の天井構造を有していることから、宋山里古墳群と同じく王族が葬られた古墳群であり、立地条件からも墓地を選地する宗教的な理念としての風水図讖思想が採用されていると言える。風水図讖思想は、百済の王族墳墓の選地においてのみ採用されたのであって、広く官人層や民衆の墓地選地に採用されることは許されなかった。以上のことから朝鮮半島における風水図讖思想は、新羅時代末期から高麗時代に僧侶道説により体系化され、それ以降に徐々に社会に浸透したと考えるべきである。

(こいけ・ひろし＝当調査研究センター調査課総括主査)

- 注1 姜 仁求1977『百済古墳研究』一志社
- 注2 韓祐欣著、平木實訳1976『韓国通史』学生社
- 注3 河内春人2018『倭の五王 王位継承と五世紀の東アジア』中公新書2470
- 注4 戴 俊英2003「中国魏晋南北朝における華中墳墓の類型的分析」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第15号
- 注5 戴 俊英2003「中国魏晋南北朝における華中墳墓の編年的分析」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第16号
- 注6 東 潮、田中俊明1989『韓国の古代遺跡 2 百済・伽耶篇』中央公論社
- 注7 韓国文化公報部文化財管理局1973『武寧王陵発掘調査報告書』、国立公州博物館研究叢書2009『武寧王陵：新報告書』
- 注8 姚 思廉2020『梁史』中華書局
- 注9 江蘇省文物管理委員会「江蘇句容陳家村西晋南朝墓」『考古』1966年3期
- 注10 江蘇省文物管理委員会「南京南郊郎家山第4号六朝墓清理簡報」『文物』1956年4期
- 注11 노형석「1500년 전 중국 난징서 온 장인이 백제 왕릉 만들었다?」한겨레신문記事、국립부여문화재연구소資料提供、수정 2022-01-28 02:30
- 注12 軽部慈恩1946『百済美術』寶雲舎。中国南朝墓制の百済への強い影響については、小田富士雄1981「南朝塼墓よりみた百済・新羅文物の源流」『九州文化史研究所紀要』26などの論考にも指摘されている。
- 注13 三浦國雄2006『風水講義』文芸新書488 文芸春秋社
- 注14 安居香山1988『緯書と中国の神秘思想』平河出版社
- 注15 村上智順1931『朝鮮の風水』朝鮮総督府編 (1972年国書刊行会復刊)
- 注16 石村洞古墳群や可楽洞古墳群、芳蕘洞古墳群などについては、以下の論文に詳述されている。東 潮1993「朝鮮三国時代における横穴式石室の出現と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』

第47集

- 注17 山本孝文2018「百濟墓制の展開と王権の動向」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集ならびに前掲注6文献による。
- 注18 前掲注6文献に同じ。
- 注19 東 潮1993「朝鮮三国時代における横穴式石室の出現と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第47集ならびに前掲注6文献による。